

《翻訳》

グリム兄弟の 『子どもと家庭のためのメルヒェン集』 の編纂ストラテジー

ローター・ブルーム (Lothar Bluhm)¹⁾

コブレンツ・ラングウ大学教授

西口拓子*

グリム兄弟の『子どもと家庭のためのメルヒェン集』は、ドイツ語で著された本のうち、ルター訳聖書と並び、最も有名で、最も広く普及し、最も翻訳されているものであろう。²⁾ 今日では、このメルヒェン集は、ドイツにおける誰もが知る教養書の最後のものとさえ言うことができるかもしれない。これは、朗読、語り、その他の様々な視聴覚メディアを通して消費される伝統的な児童文学として、文学に関心を持つ教養層だけでなく、幅広い層に親しまれている。このメルヒェンが収めた成功は、18世紀末以降と19世紀初期の近代史と密接にかかわっている。つまり、この成功は近代の発展に伴い失われた側面——意味喪失、不安、指針の喪失など——と対峙するために、必要となる補償でありかつまた救済のプログラムの一部をなしているのだ。メルヒェンにおいては、「不思議なこと」も「望みが叶えられること」も自明であり、完全が理想とされ、一つのいわゆる国家的集合的な記憶の中に共通の故郷があるという幻想、平易な語り、などが特徴として認められるのだが、こうしたメルヒェンが、この個別化された世界の中で、これまで慰めと逃げ場を提供してきたし、これからもそうであり続けるだろう。メルヒェンは、「魔法から解放された世界」³⁾において、希望を与えつつ生を支える現実逃避の場ともなっている。メルヒェンは、個人のそして社会の発展の中で、安心感を与える場所としての役割を果たしてきた。

『子どもと家庭のためのメルヒェン集』(KHM)の成功は、とりわけテキスト

* 専修大学経営学部准教授

が整えられたことに負うところが大きい。つまり、作品の編纂過程で準備されたものであり、大衆化のストラテジーによるのである。このストラテジーはヤーコプとヴィルヘルムのグリム兄弟、とりわけ弟ヴィルヘルムによるテキストの編纂と密接に結びついている。そうしたテキストの成立過程を経ることで初めて、一般に受け入れられる語りのスタイルと、開かれた意味が可能になったのである。これが現在まで長く続いているグリム兄弟のメルヒェンの出版の成功をもたらしたのだ。本稿では、テキストに対する技術的な編纂手法を、大衆化の中心的なストラテジーのひとつとして考察する。

最初に書き留められた時 [1810年手稿] は、たいていは極めて短く、本質的なことだけが語られており、抜き書き・メモ的なものだった。それが、1812/15年初版の段階で既に詳しく語られるようになっていく。その例として、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』で後に65番「千枚皮」として採用される話の、1810年のいわゆる「手稿」(Urfassung) 版を見てみよう。

千枚皮は継母によって追い出される、なぜなら、よその紳士が、実の娘をすておき、義理の娘(千枚皮)に愛の証として指輪を与えたからだ。千枚皮は逃げ、王の宮廷にたどりつき、靴磨きとなり、そしてこっそりと気付かれずに舞踏会に出かけ、料理をし、最後に公爵にスープを作り、その際、白パンの下に指輪を置く。これによって千枚皮は発見され、公爵の妻となる。⁴⁾

このように、短いメモとして書き留められていたものが、1812年初版では詳しく語りつくされ、多数のメルヒェンのモチーフによって拡大された。ここで引用した3つの文から、ほぼ8頁にわたる初版の語りが生みだされたのだ。⁵⁾ そのうちの冒頭のふたつの文を見るだけでも、加筆の文学的な傾向が明らかになるだろう。

昔々あるところに、ひとりの王さまがいて、お妃がいて、お妃はこの世で一番美しい女性で、まじりけのない金の髪をして、ふたりの間には娘もひとりおり、この子は、母親と同じくらい美しく、同様に金の髪をしていました。そのうちに、お妃が病気になる、死ぬときが来たときと悟ったとき、王

を呼び寄せて、自分が死んだら、自分と同じくらい美しくて、自分と同様の金の髪をしている人とでなければ、誰とも結婚しないようにと頼みました。⁶⁾

明らかにここでは、言語的・文体的・モチーフ的にも典型的なメルヒェンの要素が付け加えられている。それらは最初に書き留められた時 [1810年手稿] にはまだ存在しなかったものである。冒頭の「昔々あるところに」(Es war einmal) という言い回しは、メルヒェンの語りにみられる、フィクションであることを示す古典的なシグナルである。美しさの描写は常套文句となっている。つまり常に似たような方法で類型化された表現となっている。メルヒェンの中の美女は、いつでも世界で一番の美女であり、髪や服は、たいいてい金か銀である。⁷⁾断片メモ [1810年手稿] と異なり、詳しく語られる初版においては、話の細部の動機付けには、はるかに大きな役割が与えられている。そうして完成した語りには、導入部に古典的な「欠如の状況」があり、続く状況を準備している。ここでは、母親の死とそれに続いて起こるであろう近親相姦のモチーフの暗示がそれである。というのも、当然ながら王は、死んだ妻と同じくらい美しい女性など見付けることは出来ず、そのため、禁じられたことでありながら、娘に目を向ける。娘の逃亡によって、本格的なメルヒェンの筋——「幸運を探し、それを見つける」——が始まる。

初版が既に多くの加筆を受けているにもかかわらず、グリム兄弟にとってはそれでも学問的な素材の収集であったし、その学問的な性格を否定することはできないし、すべきでもない。続いて上梓された改訂版 [第2版以降] において初めて『子どもと家庭のためのメルヒェン集』は、一部は根幹にかかわるほどの編集上の変更によって、その特徴的な大衆向けの語りスタイルが獲得されたのだ。その際、粗野なものを削除したり、牧歌的にしたり、縮小辞を付けたりといったことがなされた。とりわけ、弟のヴィルヘルム・グリムがこの加筆を受け持った。その加筆の仕方は、後の「説話研究」において、ヴィルヘルムのことを『『子どもと家庭のためのメルヒェン集』の著者』⁸⁾と言わしめたほどであった。そうした狭め方に問題がないわけではないのだが。

全二巻の全集版 [大きい版] は、1812/15年初版に続いて、1819年、1837年、1840年、1843年、1850年に、そして最終版が1857年に刊行された。さらに一巻本の選

集 [小さい版] は、1825年から1858年までの間に10回刊行された。とりわけ全集版の1819年第2版と1837年第3版において、一部で相当な改変が行われた。ここでも有名な例を紹介しよう。「ラプンツェル」(KHM12)である。以下の引用文は、魔法使いの女が、ラプンツェルの愚直さから、王(子)との秘められた情事に気付く場面である。

1812年初版

すぐに彼女(ラプンツェルのこと)は若い王のことがとても気に入ったので、王が毎日やって来て、上に引っぱり上げるという約束をしました。そうして二人はしばらくの間、楽しく幸せに暮らしました。そしてある時、ラプンツェルがこう言い出すまで、妖精(Fee)はそれに気づきませんでした。「名づけ親のおばさん、私の洋服がきつくなって、もう身体に合わないのはどうしてなの」「この、罰当たりな子め」と妖精は言いました。⁹⁾(下線は著者による。)

1819年第2版

すぐに彼女は若い王のことがとても気に入ったので、王が毎日やって来て、上に引き上げるという約束をしました。そうして二人はしばらくの間、楽しく幸せに暮らしました。そして夫と妻のように心から愛し合っていました。そしてある時、ラプンツェルがこう言い出すまで、魔法使いの女(Zauberin)はそのことに気づきませんでした。「名づけ親のおばさん、あなたをひっぱりあげるのは、若い王様の時よりもずっと重いのは、どうしてなの」「この、罰当たりな子め」と魔法使いの女は言いました。¹⁰⁾(下線は著者による。)

1837年第3版 - 1857年第7版

するとラプンツェルの不安は消えました。そして王子が、夫にしてくれないかと彼女に尋ねた時、王子が若くて美しいのを見て、ラプンツェルは「この人なら名づけ親のおばあさんより私を愛してくれるだろう」と考えて、「はい」と言って、王子の手の中に自分の手を置きました。ラプンツェルは「あなたと一緒にいきたいと思うけれど、どうやって下に行けばいいか分

りません。ここへ来る時に、いつも一束の絹を持ってきて下さい。それで私ははしごを編んで、出来上がったら下に降りるので、あなたの馬に乗せて連れて行ってください。」と言いました。二人は、それまで王子が毎晩やって来るという約束を交わしました。昼間はおばあさんがやって来るからです。魔法使いの女 (Zauberin) は、ある時、ラプンツェルが次のように言い出すまで、それに全く気付きませんでした。「名づけ親のおばさん、あなたを引っ張りあげるのは、若い王子様の時よりもずっと重いのは、どうしてなの。王子は一瞬で私のところに来るのに。」「この、罰当たりな子め」と魔法使いの女は叫びました。¹¹⁾ (下線は著者による。)

こうした複数の版の比較からすぐに見て取れることは、1812年の初版が最も短く、最終版——ここでは1837年から同じ——が、細部描写も多く、行為の動機も語りつくされており、最も長いヴァージョンとなっていることである。初版では何より次の2つの特徴が目につく。一つは、「妖精 (Fee)」という言葉が用いられていること、もう一つは、服がきつくなりもはや合わなくなったことを、ラプンツェルが無邪気に口にしていることである。どちらも『子どもと家庭のためのメルヒェン集』の第2版で変更された。すなわち1819年 (第2版) 以降は「妖精 (Fee)」は「魔法使いの女 (Zauberin)」という言葉に置き換えられ、きつくなった洋服のかわりに、ラプンツェルがうっかり若い王のことを口にすることで、秘密を洩らしてしまう。さらに1837年第3版からは、王が王子に変更された。初版においては、「妖精 (Fee)」というメルヒェンの登場人物によって、フランスの妖精メルヒェン——つまり18-19世紀初頭の娯楽文学——の伝統につらなることをはっきりと示していた。それらはグリム兄弟の『子どもと家庭のためのメルヒェン集』の粉本のひとつだったのである。¹²⁾ところがグリム兄弟は、狭義での「ドイツ」という国の文化に関心を寄せていたため、こうしたフランス的な背景を示唆するものは削除したのであった。「妖精 (Fee)」とは異なり、「魔法使いの女 (Zauberin)」は、より頻繁に登場する「魔女 (Hexe)」と同様に、「ドイツ的」な属性を持つ登場人物なのである。

きつくなった洋服というモチーフを取り除いたことは、テキストから性的なものを除外する傾向があったことを示している。フランスの妖精メルヒェンは宮廷の娯楽文学で、しばしばエロチックな、少なくともそうした暗示をする傾向があ

る。グリムの初版において、ラプンツェルのアバンチュールを間接的にほめかしていた言葉とそれに伴う結果——つまり妊娠し、だからこそ洋服がきつくなったのであるが——は、無害だが精彩を欠く表現に変えられた。ふたりの関係自体も、1819年以降、明らかにセンチメンタルなものにされた。ふたりは「夫と妻のように心から愛し合っていました」。こうした傾向は第3版でさらに推し進められた。1819年（第2版）の段階では、まだ「夫と妻のような」関係であり、明らかに「夫と妻として」ではなく、婚前の関係であったものが、1837年（第3版）以降は〔後者の表現に〕変えられ、ほぼ正式の婚姻関係にされたのである。というのも、ラプンツェルが若くて美しい王子に身をゆだねる前に、王子は公式に結婚の申し込みをし（王子は、自分を「夫にしたいか」と尋ねている）、それをラプンツェルは受け入れている。彼女は「ええ、と答えて王子の手の中に自分の手を置きました」。これによって公式に婚約がなされ、初期の市民の権利においては、結婚したも同然となった。性的な関係に、もはや障害は無くなったのである。このテキストの改変は、どのように『子どもと家庭のためのメルヒェン集』が、改版の過程での加筆によって、当時の市民的な道徳観により適合するようになり、19世紀初頭の道徳観に合致した児童文学へとなっていったのかを示してくれる。

テキストへの加筆の際立った特徴のひとつは、諺などの言い回しを付け加えたことである。1850年第6版への序文で、ヴィルヘルム・グリムはこのことについて次のように明確に述べている。「諺や民衆の独特な言い回しに常に耳を澄まし、それらを付け加えようと絶えず腐心した。」¹³⁾その好例が、「つぐみひげの王さま」(KHM52)の冒頭で、初版と第2版の間に行われたテキストの変更である。1819年第2版に向けての作業の際、グリムは以下の短い文章を付け加えた。はねつけた求婚者を、王女が嘲笑する言葉である。

一人目は太りすぎているので「ワイン樽」と王女は言いました。次の人は背が高すぎるので「長くてゆらゆらして、歩けない」、三人目は小さすぎるので「ちびででぶはいかさない」、四人目は青白すぎるので「青白い死神」、五人目は赤すぎるので「小作料の雄鶏」、六人目は（身体が）まっすぐでないので「暖炉の後ろで乾かした若木」。そのようにして、どの人にも何かしらケチをつけるのでした。¹⁴⁾

ここでは一連の語りが追加されたことが明らかである。付け加えられたテキストは、内容的に関連するものであり、おそらくはグリム兄弟が入手した類話のひとつに拠るのだろう。¹⁵⁾付け加えられたテキストの特徴となっている一連の言い回しは、編集者であるグリム兄弟が、一部は当時の文学から、そして、とりわけ自らの言語に関する知識から取り入れたものである。グリム兄弟が、日常生活において、また読書の際に目についた民衆的な言い回しを集めていたことは、上述の1850年版の序文でヴィルヘルム・グリムが明言している通りである。それらのメモの一部は、現存している。¹⁶⁾こうして諺や慣用句でメルヒェンのテキストを整えたことには、少なくとも三つの意義があった。第一に、こうした言い回しは、王女の人物像を、当然ながらより現実的に見せるのに役立った。というのも、王女に民衆の言葉を話させることになるからである。第二に、加えられた言葉はどれも、求婚者の身体的な特徴を嘲笑するものであるから、これが追加されることで、王女の首をかしげざるをえない性格を際立たせるだけでなく、父親とつぐみひげの王の、これまた首をかしげざるをえない行動を正当化している。読者に合わせ、テキストは大衆文学として形が整えられているのだ。劇的な部分と、登場人物の言葉の強烈さとコミカルさによって、このテキストは、当然のことながら大衆文学としての価値が非常に高められたのだ。第三に、民衆的な語りの要素を取り入れたことによって、メルヒェンのいわゆる「民衆詩としての」^{フキルクスホエジー}性格が強調された。実際にはメルヒェンは、^{ポエーティッシュ}文学的に創られたもので、綿密に戦略的に創りあげられたものなのだが、こうして言語的に形を整えることで、自然で民衆的な印象が呼び起されることになる。つまるところ、これらは芸術家や学者によって「創り出された」文学なのではなく、真に民衆の語りであること、つまりは民族の神話的な古代の伝承に由来する口頭伝承の伝統であることの証だというイメージを促進しようとしたのである。

こうしたメルヒェンへの加筆は、これが、口承もしくは口承／書承による語りの伝統の小道具を用いた生産的な遊びであることを明らかにする。口承の証としての役割を果たしているのは、いくつかのメルヒェンの結末句である。これはたいてい後の版で付け加えられたものなのだが。「ヘンゼルとグレーテル」(KHM 15)のメタフィクション風な結末句「わたしの話はこれでおしまい。ほら、あそこをねずみが走ってる。あれをつかまえたら、大きな大きな毛皮のぼうしがつくれるよ。」¹⁷⁾は、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』の1843年第5版で初めて

付け加えられたものである。この結末句によって、テキストが民衆的な語りの連鎖の伝統につらなることが示されている。この結末句はこうして、メルヒェン／文学の語りであるこの話が、民衆的な口承の語りの文化であることの証となっているのである。実際に、これは、アウグスト・シュテーパーによるアルザスの民衆本（ストラスブール 1842年）に倣って追加されたものであった。¹⁸⁾

語句の追加とは逆に、語りの一部が削除されることもある。これは語りの脱文脈化のプロセスと極めて密接に関連している。これによって、グリムのメルヒェンは、意味が定められず、意味が開かれることになった。これが、今日でも新たな投射を可能とせしめており、グリム兄弟のメルヒェンの成功に多大な寄与をしている。こうした加筆は、グリム兄弟が文学から話を採用した場合に具体的に見て取ることができる。何といても、『子どもと家庭のためのメルヒェン集』の少なからぬ部分が、文学的な源や手本から直接取り入れられたものなのである。¹⁹⁾

文学と同様のものを取り入れた場合には、グリム兄弟のストラテジーには二通りある。第一は、比較的単純なケースで、テキストを多かれ少なかれそのまま取り入れた場合である。その例が、「ヨリンデとヨリンゲル」(KHM69)である。これはヨハン・ハインリヒ・ユング＝シュティリングの自叙伝的な長編小説『ハインリヒ・シュティリングの青年時代』(1777年)からほぼそのまま採用したものだ。シュティリングの長編小説の中では、当該のテキストは、機能的な関連により、枠内の物語のひとつとなっている。これは、小説の主人公の人生の物語を、文学的にほめめかす形で映し出そうとする話であった。そうした語りの結びつきの中から取り外すことで、この話は、その本来の発話内容を失った。そして『子どもと家庭のためのメルヒェン集』においては、互いにつながりはないが似た話の中に置かれることで、グリム兄弟の考えるとこ²⁰⁾の民話であるとの印象を仲介することになった。つまりは、ひとつの文学的な説話テキストが、もともとの語りのつながりの中から解き放たれ、独立したテキストとして紹介されることにより、メルヒェンとなったのである。

こうして直接取り入れた場合には、確認することも、機能の変遷をたどることも、比較的容易である。これに対して困難なのは、文学から採用した話を書き変えて、メルヒェンのテキストとしての姿を与えた場合である。こうした複雑なケースの典型的な例で、文学史的にも芸術史的にも古くまで遡る素材史の一部をなしているのは、「エバのふぞろいな子どもたち」(KHM180)だろう。²¹⁾タイトル

が既に物語っているように、これは聖者伝風のメルヒェンで、アダムとエバのもとを神が訪ねる話である。聖書の天地創造の物語によれば最初の人間の夫婦とされるふたり [アダムとイブ (エバ)] は、子どもをたくさん産んだため、神に対して恥じる。そして子づくりを楽しんだことを神が不快に思うのではないかと恐れる。そのためエバは、子どもの半数を急いで隠し、もう半分の子らを綺麗に身づくろいして神に引き合わせる。神は、この子らを祝福し、高貴な贈り物をする。つまりその子らを王、貴族などの身分の高い人にするのである。エバは神の贈り物を目にすると、残りの子どもも連れて来る。この子たちにも神が同様に祝福し贈り物が与えられるように。神はそれを叶えてくれる。しかし、神は、エバの目からみて、低い贈り物をする。つまりその子らを農民、手工業者、日雇い労働者にするのである。エバが子どもたちを平等に扱ってくれなかったことに対して不満をもらすと、神はエバをたしなめる。自分 (神) の任務は、エバの子をもつてして世界に人を住まわせることである、と。人々の共生には、さまざまな人間が必要になるのだ、と。「それぞれが自分の身分を代表しなければならないのだ。そしてお互いがお互いを支えるのだ。身体と手足と同じように。」²²⁾

身体と手足のイメージを、ひとつの社会の中での各々の階級と人間の共生のメタファーとするものは、ヨーロッパの精神史においては幅広く流布している。この話の変遷が興味深いのは、グリムのメルヒェンの成り立ちを極めて特徴的に示してくれるためである。ヴィルヘルム・グリムはこのメルヒェンを1843年に『子どもと家庭のためのメルヒェン集』の第5版に採用した。ヴィルヘルムが利用したのは、兄のヤーコブ・グリムによる散文訳だった。それは、ニュルンベルクの有名な「市民の詩人」であるハンス・ザックスの1558年の笑話作品から、モチーフの歴史研究の一環でヤーコブがまとめ、『ドイツ古代のための雑誌』という新しく設立された^{ゲルマニステイック}ドイツ語学文学の専門機関の雑誌に1842年に発表したものであった。神から与えられた身分の話は、16世紀にはよく知られていたことは間違いなく、職匠歌としてだけでなく、喜劇や謝肉祭劇としても、いくつものヴァリエーション (作品) がある。ハンス・ザックスだけでも4回文学作品にしている。この素材は、16世紀の文学が作り出したものではなく、一世紀前にラテン語で書かれていた説教文学から取り入れたのであるが、このことにグリム兄弟は気付いていなかったようだ。この素材の源は、現在分かっているところでは、カルメル会²³⁾ 修道士のパプティスタ・マントゥアーヌスが、15世紀末に行った説教の話であ

る。²⁴⁾つまり説教の中で行うたとえ話で、信者に聖書の一節を具体的に話すためのものである。使徒パウロが、「コリントの信徒への手紙一」(12)で、キリストの身体において四肢がひとつにまとまることを話しているが、修道士バプティスタ・マントゥアーヌスは、そのことを明らかにするためにこの話をういたのである。²⁵⁾

聖書のテキストにおいては、1世紀の半ばに、多様な争いでばらばらになったコリントの村に使徒パウロが懇願しているのは、統一するよう努力し、ひとつの共通の身体の部分として自らを捉えることである。パウロが求めたのは、キリスト教の信仰による統一である。15世紀のカルメル会修道士のバプティスタ・マントゥアーヌスは、聖書のこの箇所を1400年以上も後に取り上げる際に、このつながりにおそらく気づいていただろう。15世紀の終わりには、ヨーロッパのキリスト教の共同体は、きわめて危機的な状況にあった。そして、1453年にキリスト教のコンスタンチノーブルがイスラム教のオスマン・トルコに攻略されたことで、その危機はいっそう深刻なものとなった。キリスト教のヨーロッパは、キリスト教世界の分裂を乗り越えることも、東方キリスト教を助けることも出来ないし、そのつもりもないことを示したのであった。バプティスタ・マントゥアーヌスによる説教のたとえ話は、語りの形で使徒パウロの要求を想起させることにより、当時のディスクルスに属している。つまり、続く数十年に、失われた統一とキリスト教の統一のモデルが哀願され、回顧が望まれたのだが、それに属しているのである。

その数十年後にこの素材をとりあげたハンス・ザックスは、彼の作品の中で、まぎれもなく重点を変えている。ザックスにとって重要だったテーマは、16世紀にみられた社会の変化、つまり伝統的な身分秩序の崩壊へと向かう変化であった。よって、この素材を取り入れる際のザックスの関心は、キリスト教共同体の統一ではなく、現在与えられている社会的な秩序が、神から与えられたものであり、それゆえに変えてはならないものであることを示すことにあった。

ヤーコブ・グリムにとっては、このテキストを採用する際、モチーフの素材史への関心が主であった。ヤーコブは、狭義での専門的学問的な関心から、文学史の研究の一環で、「エバのふぞろいな子どもたち」の16世紀の類話を、彼が知る限り集めたのである。1840年代には、学者も知識人も、まだ誰もザックスの包括的な全集を手にすることが出来なかったため、ザックスの笑話をもとに、それを

忠実に散文にしたヤーコプの翻訳が、素材の仲介の役割を果たした。この散文訳を『子どもと家庭のためのメルヒェン集』に採用する際、ヴィルヘルム・グリムも、兄が語り直した笑話のテキストを、ほぼ言葉通りに保持した。それでも、こうして採用される過程で、機能的なつながりは変容した。ザックスの笑話の翻訳は、ヴィルヘルムが『子どもと家庭のためのメルヒェン集』に採用したことで、メルヒェンとなったのだ。メルヒェンの加筆にあたったヴィルヘルムは、採用するのは、話のみに絞り、ザックスの笑話にある導入部と、この種のテキストに付随する教訓的な終結部を削除した。こうして、このテキストは、16世紀の笑話として特徴であったつながりを、ヴィルヘルム・グリムのもとでは失ったのである。

このテキストの変遷は、メルヒェンがどのように誕生したかの典型的な例である。²⁶⁾つまり、聖書の一節が説教の話になり、それが文学的な書き換えのもととなったのである。近代初期の文学史に関心を寄せた文学研究者であるヤーコプ・グリムが、19世紀にこの素材を扱い、散文の形式に語り直した。それが大きな変更を受けることなく『子どもと家庭のためのメルヒェン集』にメルヒェンとして取り入れられたのだ。この話は、重点が新たに置かれる度に、適した方法で変更されており、異なった機能のつながりの中に置かれた。そして最終的に、これはメルヒェンとなったのだ。実際に、このようにして初めて成立することが出来たのであった。それまでのテキストの加筆によっては、この話はメルヒェンではなく、別のジャンルの形をしており、部分的には、全く違う姿をしており、それぞれ異なる機能を担っていた。グリム兄弟は、この話の伝統、つまりこれが聖書の一か所に対してのコメントであることをおそらく知らなかったのだろう。兄弟は、ゲルマン神話との関連に関心を寄せ、ゲルマン神話にはつながりがあると考えた。メルヒェンに付けた注釈〔第三巻〕では、これを古代アイスランドの歌謡と結び付けている。ゲルマンの「神ヘイムダルが、三組の人間の夫婦のところに行き、異なる身分を作る箇所がある。²⁷⁾この太古のサガが、最終的にアダムとエバに変わったのだ」²⁸⁾。こうしたゲルマン神話とのつながりが、グリム兄弟が何十年も以前に指摘していた「太古の神話」²⁹⁾であり、それは、1843年になっても、メルヒェン集に採用する理由でありえたのである。

本稿は、グリム兄弟による『子どもと家庭のためのメルヒェン集』の編纂を扱ってきた。これにより、どのようにテキストが、メルヒェンに固有の大衆向きの語りのスタイルを獲得したか、そして語りの意味が開かれていったかを示した。

編集の際には、テキストに意識的に介入しており、それは、大衆文学の性格をもつ大衆向きの語りを目指して行われたものではなく、既に失われた民衆の語りの原型を再構築するという考えに基づいて行われたものであった。グリム兄弟による編纂作業は、本人の意図に反して大衆向けのストラテジーとなっており、学問的な素材を集めたものから、いわゆる「民話」と呼ばれるところの新しい文学形式を生み出している。

注

- 1) 本稿は、Lothar Bluhm: *Die Redaktion der Kinder- und Hausmärchen. Zu den Popularisierungsstrategien der Brüder Grimm*. In: „Und wer bist du, der mich betrachtet?“ *Populäre Literatur und Kultur als ästhetische Phänomene*. Hrsg. v. Helga Arend. Bielefeld 2010. S. 231–243. の全訳である。ローター・ブルーム氏は、コブレンツ・ランダウ大学教授で、ランダウキャンパスにおいてドイツ文学を教授し、現在は副学部長も務めている。ヴッパータール大学にてハインツ・レレケ教授に師事し、日本ではグリム兄弟のメルヒェン研究で知られているが、エルゼ・ラスカー＝シューラーやエルンスト・ユンガーなど、幅広いテーマの論文を意欲的に発表しているドイツ文学研究者である。なお、本稿には、日本語での読みやすさを考慮し、著者に了解を得た上で意訳した箇所がある。本文内にも [] に訳者による注および補足を付けた。
- 2) 既に1970年代にルッツ・レーリヒが『子どもと家庭のためのメルヒェン集』は、ドイツ語で書かれたものの中では、聖書に次いで数多く印刷され、数多く翻訳された本であることを言及している。(Sage und Märchen. *Erzählforschung heute*. Freiburg i. Br.: Herder, 1976, S. 21). それ以来、この表現はグリム兄弟のメルヒェン研究および歴史的な説話研究の常套句となっている。ハインツ・レレケによるグリム兄弟のメルヒェンに関する入門書は今日でも基本的文献だが、その裏表紙には次のように記されている。「グリム兄弟のメルヒェンは、依然としてドイツ語で書かれたものの中では、最も有名で、最も世界に広まっており、最も翻訳された本である。」 Heinz Rölleke: *Die Märchen der Brüder Grimm. Eine Einführung*. München, Zürich: Artemis, 1986 u. ö. [邦訳 ハインツ・レレケ『グリム兄弟のメルヒェン』小澤俊夫訳、岩波書店、1990年。] ベルンハルト・ラウアーも同様のことを記している。「グリム兄弟のメルヒェンは、ドイツの文化史において、世界で最も読まれ、最も広まっているものである。」 Bernhard Lauer: *Dorothea Viehmann und die Brüder Grimm*. Kassel: Brüder Grimm-Gesellschaft, 1997, S. 341. 最近では、シュテフェン・マルトウスの言及がある。「子どもと家庭のためのメルヒェンは、[...] ルターの聖書と並んで、世界中に最も知られたドイツ語の本であり、160以上の言語に翻訳されている。」 Steffen Martus: *Die Brüder Grimm. Eine Biographie*. Berlin: Rowohlt, 2009, S. 204.
- 3) [entzauberte Welt, マックス・ウェーバーが『職業としての学問』(邦訳は岩波文庫、1980年他)で、Entzauberung der Weltという言葉を用いている。ここでは、さらに以下の書も踏まえて論じている。Norbert Bolz: *Auszug aus der entzauberten Welt. Philosophischer Extremismus zwischen den Weltkriegen*. (Habilitation an der FU Berlin) München: Fink, 1989. 邦訳は『批判理論の系譜学——両大戦間の哲学的過激主義』(法政大学出版局、1997年)]

- 4) *Die älteste Märchensammlung der Brüder Grimm. Synopse der handschriftlichen Fassung von 1810 und der Erstdrucke von 1812.* Hrsg. und erläutert von Heinz Rölleke. Cologny-Genève: Fondation Martin Bodmer, 1975, S. 52. [1810年手稿の邦訳は、小澤俊夫他『グリム兄弟 ドイツロマン派全集第15巻』国書刊行会, 1989年 に所収。該当箇所は21頁参照。/フローチャー美和子訳『初版以前 グリム・メルヘン集』東洋書林, 2001年, 25頁参照。]
- 5) *Kinder- und Hausmärchen. Gesammelt durch die Brüder Grimm. Vergr. Nachdr. der zweibändigen Erstausgabe von 1812 und 1815 [...].* In Verbindung mit Ulrike Marquardt hrsg. von Heinz Rölleke. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht, 1986, Band 1 [1812], S. 308-316. その他, 以下も参照。Die älteste Märchensammlung, S. 53.
- 6) KHM-Erstausgabe, Bd. 1, S. 308. [邦訳は、吉原高志・吉原素子訳『初版 グリム童話集』白水Uボックス, 全5巻, 2008年。該当箇所は第3巻 86頁参照。その他, 乾侑美子訳『1812初版グリム童話』(上下巻, 小学館文庫, 2000年)は、初版全2巻より98話を選んで翻訳したものである。該当箇所は、下巻 4頁参照。]
- 7) マックス・リューティの以下の書は、今日でもメルヒェンの現象をとらえた基本的文献である。Max Lüthi: *Das europäische Volksmärchen.* 4., erw. Aufl. München: Francke, 1974 u. ö. [邦訳は、マックス・リューティ『ヨーロッパの昔話』岩崎美術社, 1969年, 新装版 1995年] これに続くものとして、最近の研究書では Stefan Neuhaus: *Märchen.* Tübingen, Basel: Francke, 2005, 特に S. 9.
- 8) そのように Köstlin が以下で論じている。Monika Köstlin: *Im Frieden der Wissenschaft. Wilhelm Grimm als Philologe.* Stuttgart: M & P, 1993, S. 36.
- 9) KHM-Erstausgabe, Bd. 1, S. 41. [吉原訳 前掲書 第1巻 75-76頁参照。「ラプンツェル」は1810年手稿ではなく、初版から採用された話である。]
- 10) Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen. Nach der 2., verm. u. verb. Aufl. von 1819.* Hrsg. von Heinz Rölleke. Köln: Diederichs, 1986, Band 1, S. 54. [第二版の邦訳は、小澤俊夫『完訳グリム童話』全2巻, ぎょうせい, 昭和60年。該当箇所は第1巻 89-90頁参照。]
- 11) Brüder Grimm: *Kinder- und Hausmärchen. Ausgabe letzter Hand.* Hrsg. von Heinz Rölleke. Stuttgart: Reclam, 1982 u. ö., Band 1, S. 89f. [最終版の邦訳は多数出版されている。野村滋訳『完訳グリム童話集』全7巻, 筑摩書房, 1999年, ちくま文庫版 全7巻, 2005-2006年。引用箇所は文庫版 第1巻 172-173頁を参照。]
- 12) 子ども向けの妖精メルヒェンから、ひとつの「グリムのメルヒェン」が、どのように作り出されたかに関しては、著者による以下の論文を参照。Lothar Bluhm: „Günther, Grimm und die »Marburger Märchenfrau«. Zur Entstehung von KHM 57 *Der goldene Vogel.*“ In: *Märchen in der Literaturwissenschaft.* Hrsg. von der Märchen-Stiftung Walter Kahn (Umgang mit Märchen, 10). Leipzig 2001, S. 10-19. 本稿はオンラインにも掲載されている: Goethezeitportal. URL: http://www.goethezeitportal.de/db/wiss/grimm/bluhm_khm57.pdf (2004年1月12日アップロード)。[「ラプンツェル」のもととなったシュルツのテキストおよびド・ラ・フォルスによる妖精メルヒェンは、リューティによる以下の書に全文が掲載されている。マックス・リューティ『昔話と伝説』高木昌史・高木万里子訳, 法政大学出版局, 1995年, 85-110頁。]
- 13) *Kinder- und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand, Band 1, Vorrede, S. 27.*
- 14) KHM, Ausgabe letzter Hand, Band 1, S. 264. [邦訳は、野村訳 2006年, 第3巻 51-52頁参照。]
- 15) これに関しては、著者による以下の論も参照。Lothar Bluhm: „Prolegomena zu einer His-

- torisch-kritischen Ausgabe der *Kinder- und Hausmärchen*. Mit einer textgenetischen Betrachtung des *König Drosselbart*.“ In: Ders.: *Grimm-Philologie. Beiträge zur Märchenforschung und Wissenschaftsgeschichte*. Hildesheim u.a.: Olms, 1995, S. 59-76.
- 16) これに関しては、以下の書を参照。Lothar Bluhm und Heinz Rölleke: „*Redensarten des Volks, auf die ich immer horche*.“ *Märchen-Sprichwort-Redensart. Zur volkspoetischen Ausgestaltung der „Kinder- und Hausmärchen“ durch die Brüder Grimm*. Neue Ausgabe. Stuttgart: Hirzel, 1997, insb. S. 15-23. [本書の11-36頁の翻訳は以下に掲載されている。『思想』岩波書店, 2009年 第7号, 106-142頁]
- 17) KHM, Ausgabe letzter Hand, Band 1, S. 108. [ここは、野村訳 2005年, 第1巻 225頁の訳を引用した。]
- 18) 前掲書参照。Bluhm/Rölleke, *Redensarten*, S. 54.
- 19) レレケによる以下の書は、比較可能なように見開きで両テキストを掲載している。Heinz Rölleke: *Grimms Märchen und ihre Quellen. Die literarischen Vorlagen der Grimmschen Märchen synoptisch vorgestellt und kommentiert*. Trier: WVT, 1998.
- 20) これに関してはウーターの以下の論文を参照。Hans-Jörg Uther: „Die Brüder Grimm und Heinrich Jung-Stilling. Von Jorinde und Joringel und anderen Erzählungen.“ In: Ulrich Müller und Margarete Springeth (Hrsg.): *Paare und Paarungen*. Fs. für Werner Wunderlich zum 60. Geburtstag. Stuttgart: Verlag Hans-Dieter Heinz, Akademischer Verlag, 2004, S. 294-305, 特に S. 301-303.
- 21) これに関して詳しくは、著者の以下の論文を参照。Lothar Bluhm: „Hans Sachs, Jacob und Wilhelm Grimm: *Die ungleichen Kinder Evas*. Zur Entstehungsgeschichte von KHM 180.“ In: Bluhm, *Grimm-Philologie*, S. 43-57.
- 22) *Kinder- und Hausmärchen*, Ausgabe letzter Hand, Band 2, S. 352.
- 23) [パレスチナのカルメル山に起源をもつ修道会。カルメル会修道院は、13世紀前半から西ヨーロッパの各地に作られた。『ブリタニカ国際大百科事典』TBS・ブリタニカ, 1973年, 第2巻 114頁。]
- 24) Baptista Mantuanus: *Bucolica*, 1498 u. ö. Ecloga VI: „Cornix de disceptatione rusticorum et civium“, v. 53-104. 以下の書に復刻されている。Valentin Schumann: *Nachtbüchlein* (1559). Hrsg. von Johannes Bolte. Nachdr. Hildesheim, New York: Olms, 1976, S. 372f.
- 25) [「あなたがたはキリストの体であり、また、一人一人はその部分です。」「コリントの信徒への手紙一」12, 新共同訳『聖書』日本聖書協会, 1988年, (新) 316頁。]
- 26) 成立史とグリム兄弟の「メルヒェン工房」に関しては、さらに以下のレレケの論文集を参照。Heinz Rölleke: „*Wo das Wünschen noch geholfen hat*.“ *Gesammelte Aufsätze zu den „Kinder- und Hausmärchen“ der Brüder Grimm*. Bonn: Bouvier, 1985; 同様にレレケによる: *Die Märchen der Brüder Grimm. Quellen und Studien. Gesammelte Aufsätze*. Trier: WVT, 2000; 同様にレレケによる: *Alt wie der Wald. Reden und Aufsätze zu den Märchen der Brüder Grimm*. Trier: WVT, 2006.
- 27) [旅に出たヘイムダルは、リーグと名乗って三組の夫婦のもとに宿泊する。老夫婦アーイとエッダからは肌の黒い子が生まれ、その子孫から奴隷の一族が発した。アヴィとアンマの子孫からは自由農民の一族が発した。ファジルとモージルの夫婦の息子ヤルルに、リーグはルーネを教え、財産を与えた。ヤルルは支配者となる。谷口幸男訳『エッダ——古代北欧歌謡集』新潮社, 1973年, 201-205頁より。]

- 28) Kinder- und Hausmärchen, Ausgabe letzter Hand, Band 3: Originalanmerkungen der Brüder Grimm zu ihren Märchen von 1856, S. 253.
- 29) 初版の序文を参照。KHM-Erstaussgabe, Bd. 2, Vorrede [datiert 30. 9. 1814], S. VIII: 「これらの民衆のメルヒェンには、失われたとされるドイツの神話がある。[...]」。[邦訳は吉原訳前掲書 第4巻 9-110頁。この話を採用した1843年よりも「何十年も前」の1815年の序文の中で、神話とのつながりが語られていたことを示す。]